

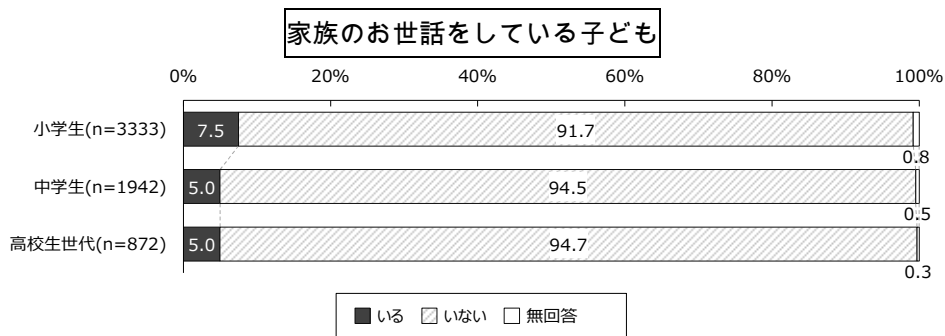
品川区 生活の実態調査
(ヤングケアラー調査)
ヤングケアラーコーディネーターより

品川区
令和7年3月

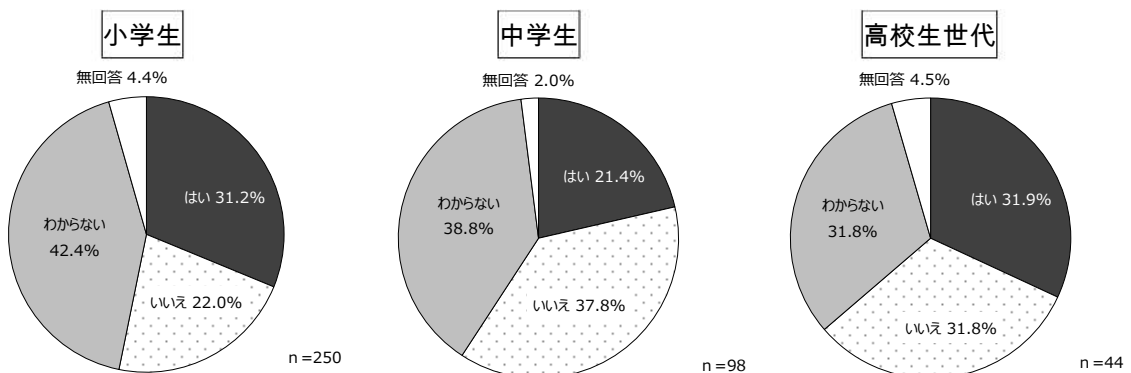
調査結果からの考察

1. ヤングケアラーの理解と自覚

- 家族の中に、お世話をしている人がいると答えた割合は、小学生 7.5%、中学生 5.0%、高校生世代 5.0%であった。1学級につき1人~2人のヤングケアラーが存在している可能性があることがわかった。

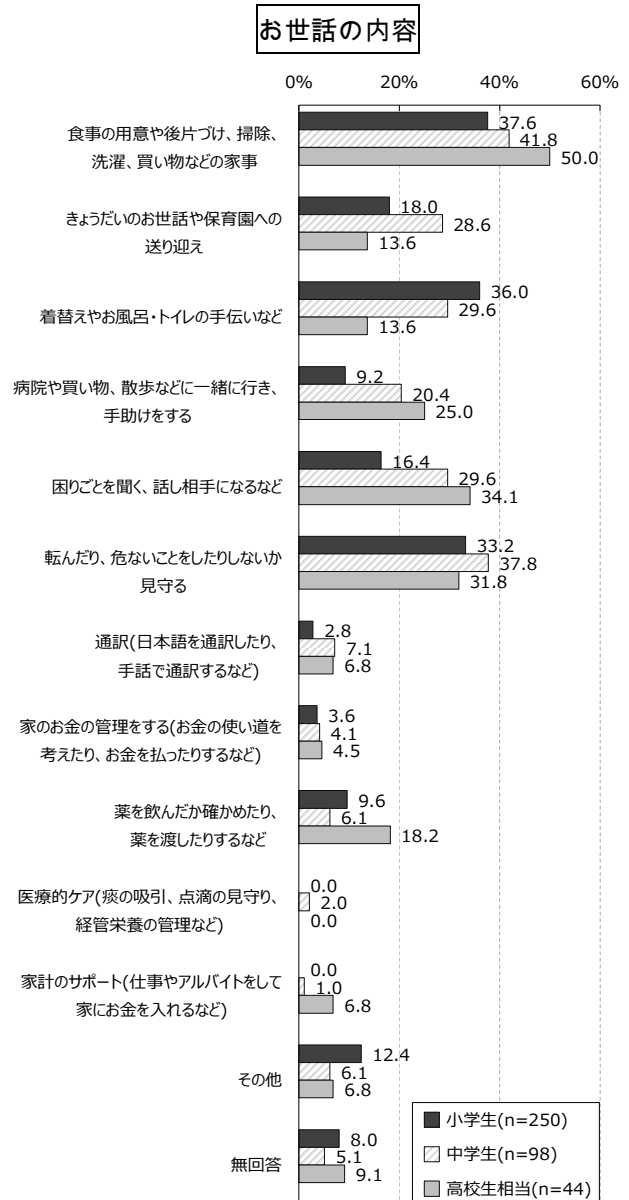


- お世話をしている家族がいると答えたとの、ヤングケアラーに当てはまる場所があると思うか？の質問に「はい」と回答したのは小学生の 31.2% (わからない含め 73.6%)、中学生の 21.4% (わからない含め 60.2%)、高校生世代の 31.9% (わからない含め 63.7%) とのデータがある。「わからない」の回答者の中には、家族のお世話をしていると感じているという回答や、家族のことで世話をするのは当たり前等の回答もあり、ヤングケアラーについての知識や自覚がないため「わからない」という回答となっている割合も一定数いることがうかがえる。
- 今日ではまだ「ヤングケアラー」という言葉が、美談やたまたま深刻な状況のみに限定して語られることも少なくない。しかし、慢性的な疾患や障害は誰にでも起こり得る上に、現在の日本の社会的背景である核家族やひとり親世帯、高齢者夫婦世帯が増えて、地域の繋がりが希薄化し、「みんなで協力し合うこと」の選択が難しくなっている中で「ケアをする」ということはこれまで以上に身近な問題である。
- 「ヤングケアラー」という言葉が子どもと家族を支える言葉として広がり、大人も子どもも支え合える共通言語となるよう理解を広げていく必要がある。



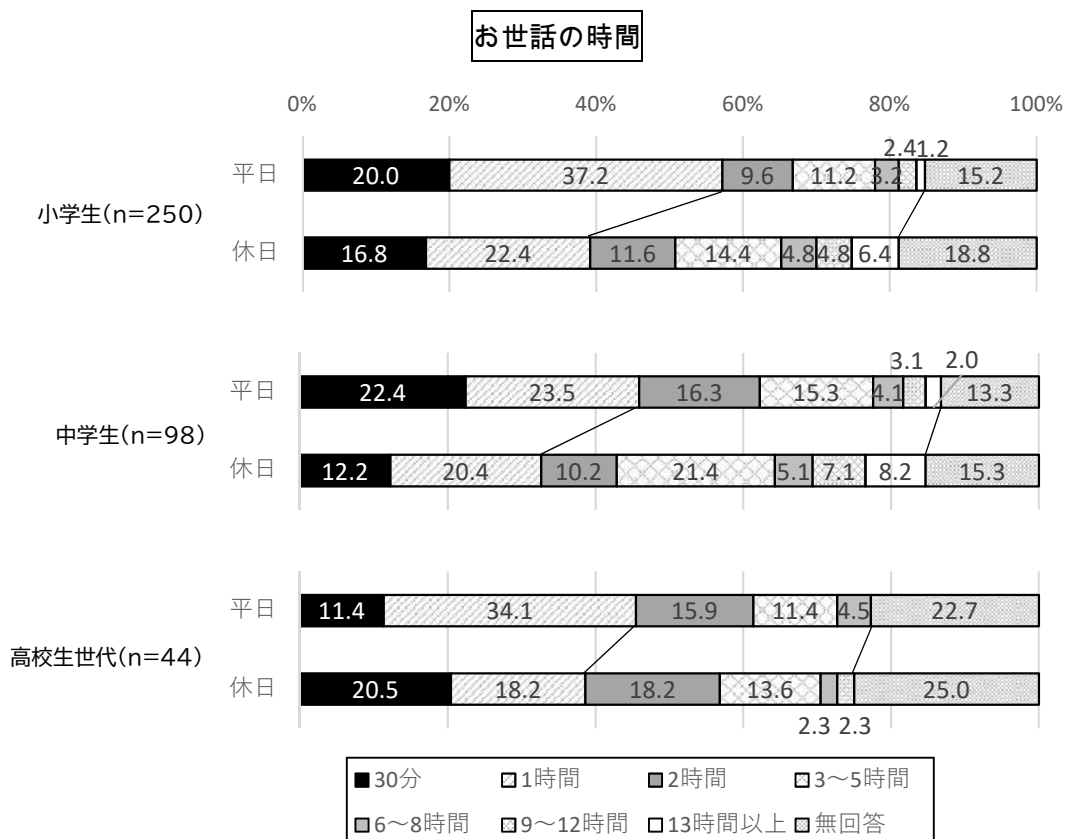
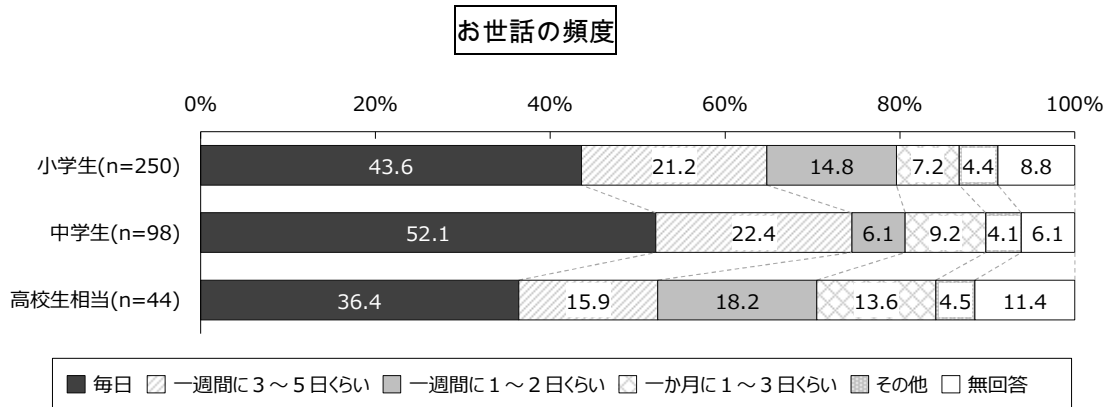
2. お世話の内容

- お世話の内容において、「家事」をしている割合が小学生 37.6%、中学生 41.8%、高校生世代 50.0%と最も多い。家事の中でも「お手伝い」と「お手伝いを超えている状態」であるかは実際に行っている内容や時間や頻度と、実生活にどれほど影響を及ぼしているのかを把握した上で、子どもと家族をどのように支えていけるかを考える必要がある。
- 「転んだり、危ないことをしないかの見守り」は家族の近くに居続けることが必要なので、短時間となっても時間や活動に制限がかかる状態である。「見守り」をしている割合が、小学生 33.2%（3 番目に多い）、中学生 37.8%（2 番目に多い）、高校生世代 31.8%（3 番目に多い）、と「家族に世話をしている人がいる」と答えた人たちの中でも多い割合となっており、ヤングケアラーの多くが活動に制限がかかっている可能性が示唆される。また、見守りの理由によっては、いのちに関わる場合もあり、子どもの責任の範疇を超えて 1 人で担うには心理的ストレスも生じうる。見守りを行っているヤングケアラーには、どのような見守りを日々行っているのか、状況を確認することも大切となる。
- 「家のお金を管理する」の割合は小学生 3.6%、中学生 4.1%、高校生世代 4.5%、「薬を飲んだか確かめたり薬を渡したりする」などの割合は、小学生 9.6%、中学生 6.1%、高校生世代 18.2%となっており、「医療的ケア」を行っている中学生は 2.0%存在している。これらのケアは、多くの知識や高度な技術を必要とすることも少なくない。子どもは大人と比べて、多くの知識や経験をもっているわけではないが、介護やケアの中にはその場で判断を必要としたり、知識や技術が必要となる場合も多くある。家族以外が行う場合には知識をもった専門職や医療福祉職が対応しているものである。しかし、それを家族の中の子どもが担っている場合には知識やスキルを補うなどのサポートや、社会資源の活用を促したり、大人が担えるよう工夫することも必要である。もし子どもがお世話をすることに積極的であった場合でも、見守りや声かけを繰り返し、必要に応じて第三者の視点を伝えるなどの積極的な関わりを行うことも周囲の大人ができることの一つである。



3. お世話の頻度と長さ

- 毎日お世話をしている割合は、小学生 43.6%、中学生 52.1%、高校生世代 36.4% であり回答者割合の中で最も多い。また、平日に 3～5 時間以上家族の世話をしていると回答した合計割合が全ての世代で約 15～25% 存在している。平日学校がある日に長時間家族のお世話を担っているということは、学業や遊びなどに時間を使うことが難しい状況にあることが推察できる。



- お世話をしている「つらいと感じるときがある」と答えている人の、一日のうちに
行うお世話の平均時間は小学生（平日）2 時間 45 分（休日）4 時間 16 分、中学生
（平日）3 時間 29 分（休日）5 時間 45 分、高校生世代（平日）2 時間 19 分
（休日）3 時間 13 分とお世話の平均時間が長時間に渡っている。一日のうちに
行うお世話の平均時間が「あまりない」と「まったくない」と答えている人と比べ
ても長い時間となっている。
- お世話に長い時間を割いている場合には、お世話の負担を減らせるよう働きかけ
ることが望ましい。具体的には、配食支援や家事育児支援などの社会資源による
支援導入を検討することが必要と考えられる。

お世話の時間（平均）

		問13 一日のうち何時間くらいお世話をしていますか。					
		小学生 平日平均 (n=250)	小学生 休日平均 (n=250)	中学生 平日平均 (n=98)	中学生 休日平均 (n=98)	高校生世代 平日平均 (n=44)	高校生世代 休日平均 (n=44)
問15 お世話をしている「つらい」と感じるときはありますか。	つらいと感じるときがある	2時間45分	4時間16分	3時間29分	5時間45分	2時間19分	3時間13分
	あまりない	2時間03分	4時間14分	2時間59分	5時間12分	2時間17分	1時間45分
	まったくない	1時間40分	3時間12分	1時間47分	2時間57分	1時間14分	1時間00分
	わからない	2時間13分	3時間42分	3時間18分	7時間18分	-	-

※「つらいと感じるときがある」は、つらいと感じることが「いつもある」「ときどきある」と回答しているものの統合値です。

- すべての年代で、家族のお世話をする時間が長い子どもほど、お世話をしている
つらいと感じる頻度が「いつもある」「ときどきある」と回答し、お世話が長時
間に及ぶことでつらさを感じる割合が増えている。子どもが自由に過ごす時間が
なくなることは、子どもの権利条約の 4 原則のひとつである「子どもにとって最
もよいことを受ける権利」が担保されていない状態である。他にも「教育を受け
る権利」や「休み遊ぶ権利」が脅かされる可能性がある。長時間お世話をしてい
る子どもへは、子どもの話をよく聞き、お世話する時間を減らせるよう選択肢を
増やすことや、負担感を減らすよう積極的に関わるが必要となる。

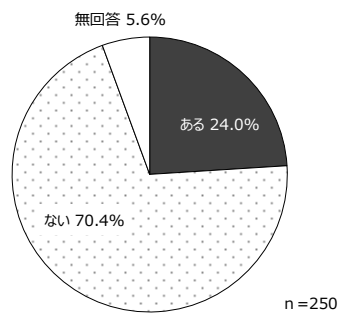
子どもの権利条約 出典：日本ユニセフ協会ホームページ（※1）

	2 差別の禁止（差別のないこと） すべての子どもは、子ども自身や親の人種や国籍、性、意見、障がい、 経済状況などどんな理由でも差別されず、条約の定めるすべての権利が保障されます。
	3 子どもの最善の利益（子どもにとって最もよいこと） 子どもに関することが決められ、行われる時は、 「その子どもにとって最もよいことは何か」を第一に考えます。
	6 生命、生存及び発達に対する権利（命を守られ成長できること） すべての子どもの命が守られ、もって生まれた能力を十分に伸ばして成長できるよう、 医療、教育、生活への支援などを受けることが保障されます。
	12 子どもの意見の尊重（子どもが意味のある参加ができること） 子どもは自分に関係のある事柄について自由に意見を表すことができ、 おとなはその意見を子どもの発達に応じて十分に考慮します。

4. お世話の悩みを相談することは少ない

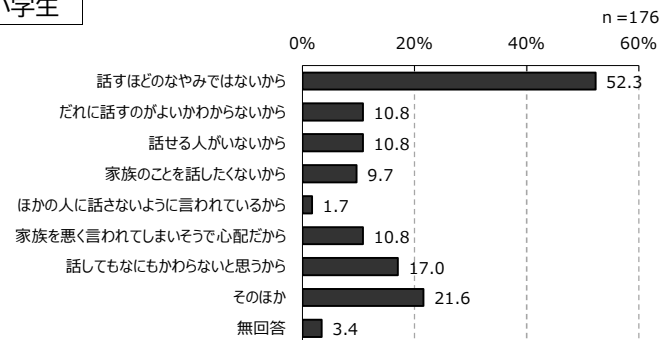
- 小学生は 70.4%、中学生は 60.2%、高校生世代で 63.7%が家族のことやお世話の悩み相談を誰かにしたことが無いと回答しており、理由はすべての年代で「話すほどの悩みではないから」と回答している人が最も多い。それ以外の回答は、何らかの話をしない理由や「話してもなにもかわらない」という諦めの感情を抱えていることが示されている。

お世話の悩みを話したことがあるか

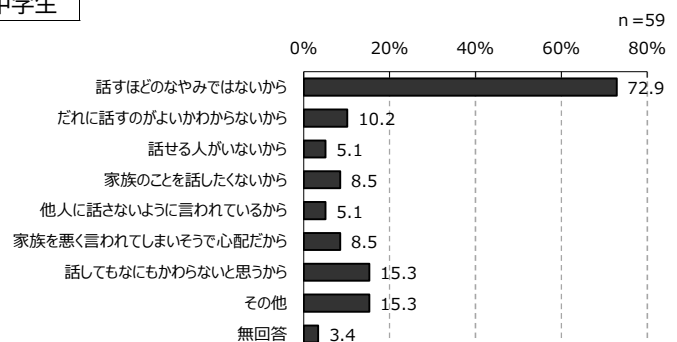
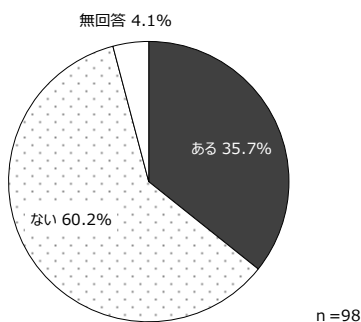


お世話の悩みを話さない理由

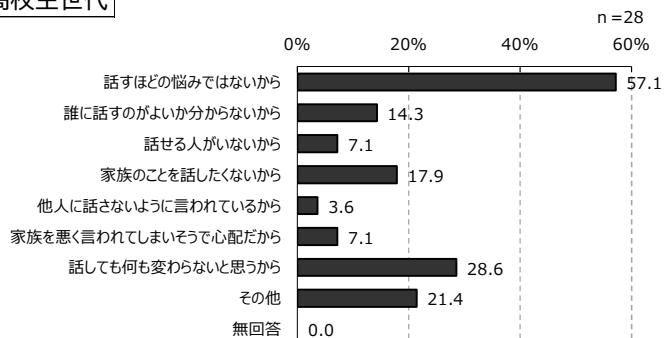
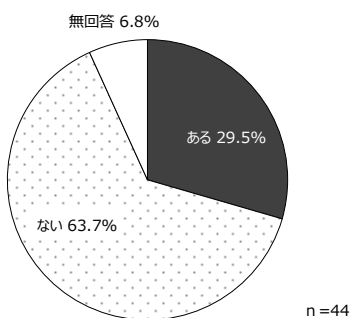
小学生



中学生

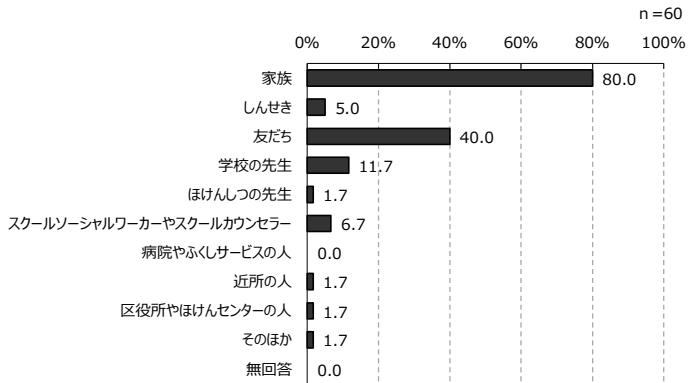


高校生世代

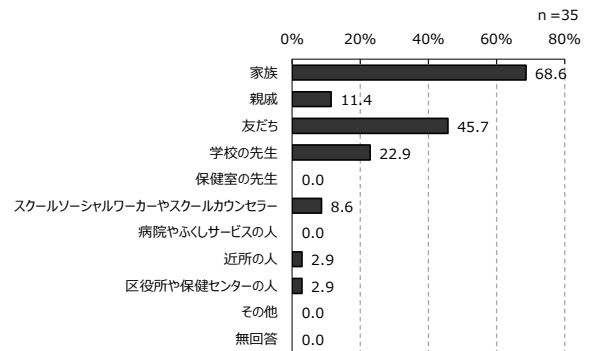


- 悩みを「誰かに話したことがある」と回答した中でも、小中学生の相談相手は「家族」が圧倒的に多く、高校生世代だと「友人」に次いで「家族」と答えている。いずれにしても、専門職などの知識のある第三者の大人へ十分に相談できていない状態であると考えられる。

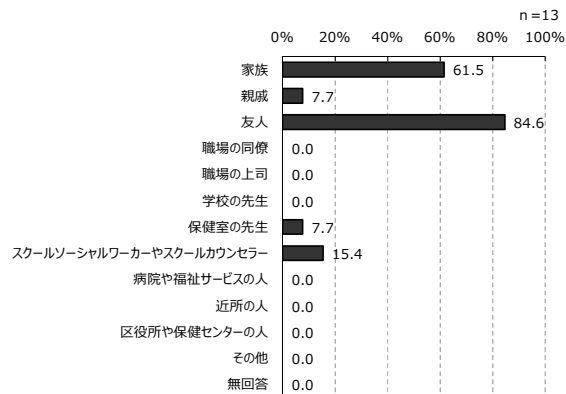
小学生



中学生

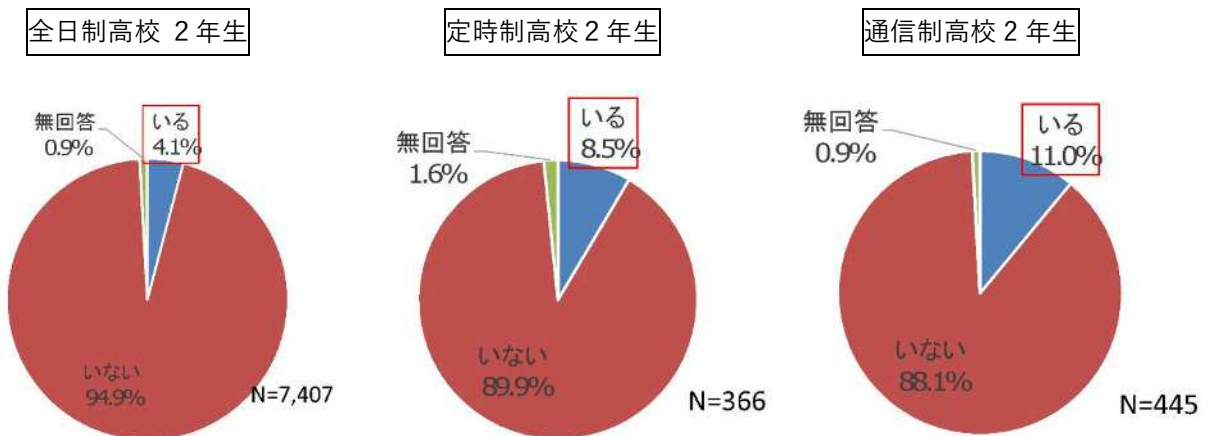


高校生世代



【今回のアンケートの考慮すべき点】

- 令和 2 年の厚労省調査によると、家族のケアをしている高校生世代は、全日制高校 2 年生で 4.1%、定時制高校 2 年生 世代で 8.5%、通信制高校 2 年生で 11.0%とのデータもあり、定時制や通信制高校生のヤングケアラー率が高い傾向にあるが、本アンケートでは定時制や通信制高校生の回答者が少なく実態は掴み切れていない。



出典元：厚生労働省 令和 2 年度 ヤングケアラーの実態に関する調査研究について (※2)

まとめ

- 今回のアンケート回答結果より、子どもがお世話をしている時間が長くなるにつれ、つらさを感じている割合が高くなる傾向がわかった。また、「お世話の悩みを話したことがありますか」の問いに話したことがあると回答している子どものほとんどが「家族」や「友人」であり専門家への相談はハードルが高いこと、1人でお世話をしている割合が約2〜3割と一定数いることがわかった。
- 長期にお世話を担いながら子ども時代をなんとか過ごしたとしても、その負担が大人になったあとの心理・社会的影響が大きいことが課題である。学業や進学の制限、孤立体験や多くのケアを抱えることによるストレスから、成人後の生きづらさや就労などへも大きく影響を及ぼしていることも事実である(※3)。
- 不登校や学業不振の学生の中に多くのヤングケアラーが存在している事が示唆されていたり(※4)、東山ら(2023)の研究では非行とも密接なかわりがある事が示されている(※5)。そのため自覚を持っていない子どもに過度な負担がかかっていると気づいたときには、本人から訴えが出ないとしても周囲からの働きかけや積極的な関わりが必要となる場合がある。しかし、心掛けないといけないのは、全てのお世話を子どもがしなくてよくなるようにする必要はなく、むしろ今までのお世話の負担を本人たちが肯定的にとらえられるような関わりや声かけを行い、自尊感情を育み、同世代と同様に選択肢が得られるよう関わっていくことが大切である。
- 子どもがケアを行う要因には、家庭の状況に加えて単身世帯の増加や高齢化、地域の繋がり減少など様々な背景がある。また、ヤングケアラーのいる家庭にはそれらの複雑な事情が絡み合っていることもしばしばある。ケアがあってもなくても、家族みんながより豊かに暮らせるように社会全体で支えていくことがヤングケアラー支援である。
- ヤングケアラー・若者ケアラーたちは、同世代と比べて明らかに自分のための自由な時間や行動範囲に制限があり、つらさを抱えている子ども・若者がいる一方で、ケア経験によって得た価値が多くあることが見落とされがちである。負担や困難に立ち向かい対応している子ども・若者の心情を理解し、これまでの経験を尊重したうえで、彼らを「助ける」という視点ではなく、寄り添いながら知識のある大人の目線で選択肢を示すこと、子どもや若者が主体的に自分自身の人生とケアのことを考えられるよう伴走することが重要である。
- ヤングケアラー・若者ケアラーの抱える困難と、経験から得ている価値の両方を理解している人々がたくさんいるということ。それが、ヤングケアラーや若者ケアラーを支える社会づくりの一歩になるのではないかと思う。

参考文献・資料

(※1) ユニセフ 子どもの権利条約

<https://www.unicef.or.jp/crc/principles/>

(※2) 令和 2 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 ヤングケアラーの実態に関する調査研究 報告書；三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社

<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000767891.pdf>

(※3) Young carers in the UK: the 2004 report. (Aldridge & Becker, 1993; Dearden & Becker, 2004)

(※4) 平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 ヤングケアラーの実態に関する調査研究 報告書；三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社

<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000592954.pdf>

(※5) 少年鑑別所在者に対するヤングケアラーに関する調査についての研究；函館少年鑑別支所 東山 哲也；2023 年；

https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/9/5/3/1/6/6/1/_/08_r5shiryo4-2.pdf